

原哲夫さん、「こちら葛飾区亀有公園前派出所」の秋本治さんらを輩出した学校として知られています。

——高校卒業後、大学は薬学部に進まれました。薬剤師になりたいと考えていたのですか。

鎌形 もともと、歴史の本を読むのが好きだったので、大学では「歴史の勉強がしたい」と考えていました。そこで父親に「大学では歴史を専攻したい」と進路について相談したところ、「歴史で食っていくのは難しいから、別の道を考えなさい」と諭されました。そのときに漠然とですが、将来のことを考えるようになり、大学は情報工学系か、医療系かで迷いました。

教育熱心だった父親のおかげで、実は35年前、我が家には当時珍しかったパソコンがあったのです。Windowsなどない時代で、NECのPC9801でした。「これからの時代はパソコンを使いこなさなくてはダメだ」という父親の方針でした。パソコンに慣れ親しんでいたこともあって、情報工学系に進もうかとも思ったのですが、子どものころに身体が弱くて、医師に助けってもらったこともあり、その恩返しをしたいと医療系の道を考えるようになったのです。残念ながら、中高と

あまり勉強をしていなかったので医学部への進学は諦め、薬学部に進むことにしました。

同期入社2人が相次いで急逝無力さを感じて医学部に編入

——大学卒業後、製薬メーカーのMRの仕事を選ばれましたが、数年で退職し、医学部に編入されました。何がきっかけですか。

鎌形 きっかけは同期入社仲間が2人、20代半ばで病に倒れて、亡くなったことです。

MRとしての日々は本当に充実していて、幸運にも1年目から高い営業成績を記録することができました。新しい医薬品を通じて人の命を助けることができる、MRの仕事には、とてもやりがいを感じていたのですが、尊敬していた2人の同期が相次いで病に倒れて急逝するという出来事を目の当たりにして人生観が一変しました。

何度もお見舞いに行き、本人の無念な思いに触れるにつれて、「自分ももっと真剣に生きないといけない」と自問自答するようになり、病に倒れた同期と向き合ううちに、自分の無力さを感じるとともに、自分の家族や大切な友人が病に倒れてしまったとき、相談に乗ることが

できる、頼りにされる存在になりたい、手を差し伸べられる存在になりたいと、医師になることを決意し、医学部に編入することにしました。

7月に会社を辞めて、予備校の夏期講習を受けながら突貫工事のような受験勉強でしたが、幸いにも10月に北里大学医学部の編入試験に合格しました。当初は厳しいかなとも思いましたが、高校生と背水の陣で臨む大人では受験勉強に対するテンションが段違いであり、やればできるものだなと思います。

編入試験合格後、入学までの半年間は、学費を貯めるために薬剤師の仕事を始めました。結局、薬剤師としての仕事を本格的にしたのは、このときと入学後のアルバイトだけでしたが、薬剤師としての現場経験を積めたことは良かったと思っています。なお、医学部の学費は総額で3000万円近くかかりましたが、父親から借りたお金と奨学金、MR時代の貯金、薬剤師として稼いだバイト代で何とか賄いました。

患者を助けるのは自分だけ 救急医療に心を寄せる

——医学部卒業後は救命救急の道に進まれました。何か理由はあったのですか。

鎌形 当初は、がん治療の専門家を目指していました。がん治療関連の論文も多数読み、研修医のときにはがん治療に詳しい先生とのディスカッションを重ねていました。

ただ、救急医療の現場で救命救急医の仕事ぶりを目の当たりにし、その仕事に興味を持つようになっていきました。放っておくと1時間以内に死んでしまうような患者さんの命を救っていく救命救急チームの姿に魅かれ、自分も目の前にいる患者さんの命を救える医師になりたいと救命救急医としての道を選択しました。

——救命救急医として活躍していたにもかかわらず、その後、医療現場を離れて、慶應義塾大学大学院でMBAを取得されました。救命救急医の現場からは、かなり「離れている」と感じますが、なぜMBAを取得しようと思ったのですか。

鎌形 救命救急医としての仕事は非常にやりがいがありました。ただ、救命救急医療は患者さんが搬送されてきた時点で行うことにほとんど差はなく、続けるうちに救急医療や災害医療のアウトカムを上げるには、医師を含めた医療者一人ひとりが研鑽すること以上に、迅速なトリアージや患者さんの既往歴等の情報連携、それに基づいた初期対応の実践、

かまがた・ひろのぶ ●2003年、明治薬科大学薬学部製薬学科卒業後、中外製薬株式会社入社。北里大学医学部医学科編入、卒業後、都立多摩総合医療センター、東京医科大学病院救命救急センターを経て、17年、慶應義塾大学大学院MBA取得。東北大学発ベンチャーや東京大学発ベンチャーの起業にかかわりながら、19年、うちだ内科医院を継承開業。20年、医療法人季邦会理事長。23年、株式会社EN代表取締役社長



恩返しがしたいと 医療系の道を選択

——最初に鎌形先生の原点から話を伺います。子どもの頃はどんな家庭でどのように育ったのですか。

鎌形 生まれは東京都足立区でしたが、物心がつくころには埼玉県草加市に移り、大規模な団地で中学に入るまで育ちました。父親は普通の公務員で、決して経済的に豊かな家庭ではありませんでした。それでも非常に教育熱心で、兄と私を私立の中高一貫校に通わせてくれました。私たち兄弟の学費以外にはあまりお金を使わない家だった、と子ども心

にも思いました。

兄はとても頭が良い人で、勉強している姿をほとんど見た記憶はないのですが、それでもさりとて医学部に合格して、医師になりました。一方、私は小学校のなかでは成績上位でしたが、進学塾のなかだと中くらい程度。子どものころは、友だちと遊ぶことに夢中で、勉強にはあまり熱がはいりませんでした。それでも、なんとか中高一貫の本郷中学・高校に進学することができました。ただ、中学生のころは格闘ゲームなどに熱中して、毎日のようにゲームセンターに通っていました。

余談になりますが、私が通っていた本郷中・高校は漫画「北斗の拳」の